おうてんいん・インフォメーション





月例のシリーズ講座「寺子屋トーク」は、都市、教育、家族、ボランティアなど、幅広いテーマから、〈こころ〉の読み方、感じ方を学びます。ぜひみなさんのご参加をお待ちしています。

●

【第1回寺子屋トーク】
・「EQのかしこい育て方、教えます」
～地球時代の子育てを考える～
・講　師…金　香百合さん
（大阪YWCA幹事）

今、話題のEQ（心の知能指数）って何？　あたまとこころのバランスの良い教育にはどんな秘訣があるのでしょうか。開発教育の第一人者が楽しく語ります。
・日　時…5月22日(木)10:00～12:00
・会　場…應典院本堂ホール
・定　員…100人(先着順)
・参加料…会員500円(一般1000円)

●

【第2回寺子屋トーク】
・「新家族物語・地域から母子を考える」
・講　師…山崎高哉さん
（京都大学教育学部教授）

総合幼児教育の第一人者の山崎高哉教授が語る、これからの子育て論。育てる教育から、自ら育つ教育へ。子どもの自立心や意欲を育てる家庭教育を考える。
・日　時…6月23日(月)10:00～12:00
・会　場…應典院本堂ホール
・定　員…100人(先着順)
・入場料…会員500円(一般1000円)

春の講座のご案内

お待たせしました。應典院寺町倶楽部、春の講座がスタートします。

應典院のキーワード「気づき・学び・遊び」をさらに広げて、知識中心の講座ではなく、学ぶ人自身の参加・体験・交流をねらいにしプログラムを用意しました。たがいに学びあう、仲間づくりがたいせつなテーマです。

また、3講座ともに各ジャンルの専門団体・学校の協力を得て、オリジナリティに富んだ中身づくりを心がけています。

発見と出会いのメニュー、いろいろ。あなたの「参加」で、学びの経験をもっとたのしんでみませんか。

●

【わたしから始まる
コミュニケーション学入門】
～「家族」から人間関係を見直す～

人と人のコミュニケーションにもコツがあります。それを学べば、もっとゆたかで、やわらかな人間関係が築けるはず。家族とのかかわりを通して、わたしらしさのコミュニケーションを学びます。
・日　時…5/27、6/3、6/10、6/17、6/24、7/1
火曜の10:00～12:00の全6回
・定　員…40人程度
・受講料…10,800円(一般12,000円)
・協　力…大阪YWCA専門学校

【WORLD STUDY
在住外国人ママに聞く】
～ところ変われば、子育て変わる？～

外国人が見た日本の家庭教育ってどんなの？関西に暮らす、世界のお母さんたちの体験から学ぶ「もうひとつの子育て」。同世代の母親同士、親しく話し合いながら世界を感じるワールドスタディ。
・日　時…5/21、5/28、6/10、6/18、6/25
水曜の10:00～12:00の全5回
（3回目のみ火曜）
・定　員…36人程度
・受講料…6,750円(一般7,500円)
・協　力…関西国際協力団体協議会

●

【ホームパーティーの達人】
～食卓から始まるコミュニケーション～

ホームパーティーとは、親しい仲間たちの交流の場。料理や飲み物、食器、花などが、つどいを彩り、人とのつながりを演出します。各分野の講師が、これからのホームパーティーのこころと実践を語る、画期的な講座。
・日　時…5/23、6/13、6/27、7/4、7/11
金曜の10:00～12:00の全5回
・定　員…36人程度
・受講料…9,000円(一般10,000円)
・協　力…大阪ガスエネルギー・文化研究所

予告・第3回寺子屋トーク

7月14日（月）夜　文化人類学者●上田紀行さん（予定）

NHK未来潮流でも話題の、いま最高にホットな若手研究者。
東京工業大学助教授。新著『癒しの時代をひらく』が話題。新宗連青年会共催。

バングラデシュのお祭りだ！

～シュプラニール25周年全国キャラバン・関西のつどい～
（應典院寺町倶楽部協力事業）

6月22日（日）　正午～16時半

應典院山内の随所でサリーあり、カレーやチャイありの1日バングラ・フェスティバル。現地NGO最新報告や華麗なインド舞踊もあって、アジア気分を満喫。

ゲスト／長畑　誠・イスラム・ヒロ・斎藤千宏　主催／シャプラニール関西＋アーユス関西

※当日ボランティア(8:00～18:00)募集中です。初心者歓迎。事務局までお気軽にお問い合わせください。

應典院水曜サロン

水曜サロンはバリアフリーの自由空間。バラバラでいっしょの時間を探そうよ。秋田住職のお話もあります。要電話予約。
・オープン記念　5月7日（水）20:00～
橋口譲二さんと「職業」を語る
・第１回　5月14日（水）
昼の部/14:00～　夜の部/18:30～
・第２回　6月7日（土）
昼の部/14:00～
・第３回　6月11日（水）
夜の部/19:00～

●

アーユス関西・TABLE TALK

・ゲスト…グェン・ティ・テュイ・アンさん
・日　時…5月12日(月)6:30～
・参　加…300円

隔月の国際協力講座。今回は、アジアの元気国ベトナムのこれからについて在阪のベトナム人グェンさんと語り合う。

SALUT NO.1　発行日／1997年4月25日(隔月発行)　発行所／應典院寺町倶楽部　〒543大阪市天王寺区下寺町1-1-27　TEL.06-771-7641

應典院寺町倶楽部のニューズレター

Salut



呼吸するお寺・應典院、スタート

新しい「こころの文化」の拠点、應典院はいよいよ4月27日、オープン。あわせて、会員組織である、應典院寺町倶楽部もその活動を開始することになりました。

應典院は、これまでのお寺とはまったく違ったコンセプトで発想・企画された都市寺院。宗派・宗教を問わず、「いまあることの尊さ」に自ら気づくため、いろいろな経験や交流ができるよう、寺としての役割を思い切って書き換えました。

應典院には、檀家さんはいません。ですから、お葬式やお墓もありません。代わりに、多様な文化 ── 子ども、ボランティア、教育、環境、国際理解、セラピー、そしてアート ── を切り口に、会員制による寺の運営を目指していきます。

ともに学びあい、支えあいながら、いっしょに「こころの文化」を育てていきましょう。

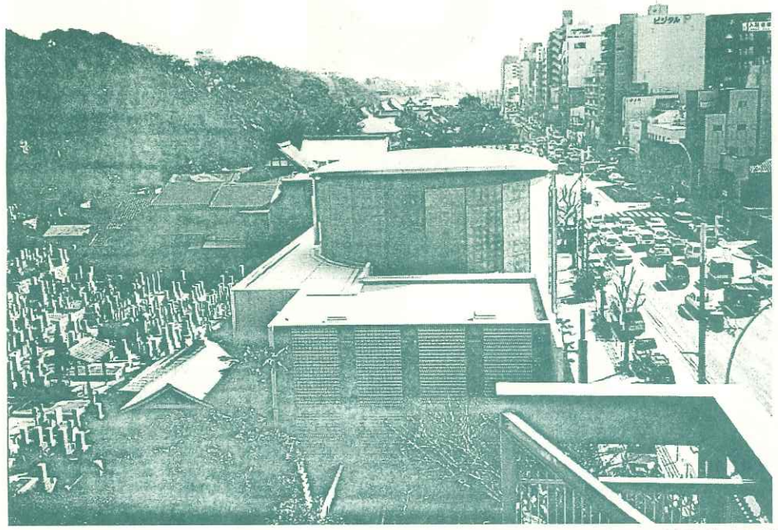
本誌は、應典院寺町倶楽部の会報として隔月で発行、今後の活動予定や報告を掲載していきます。また、あなたの誌上参加もお待ちしています。どんどんアイデアやご意見をお寄せください。

あなたから始まる仲間づくりのネットワーク、まずはにかく新しくできた應典院へぜひお出でください。

気づきから始まる〈癒し〉

文・田中丸なほこ

劇場寺院・應典院スタート



◀下寺町を北側から眺望する。鬱蒼とした生玉の杜と寺々の伽藍。350年前から止まったままの風景だ。手前が應典院。

寺町のこころは「癒し」

意外に知られていませんが、大阪は全国で３番目にお寺の多い「伽藍の町」。京都や奈良のような有名寺院は多くありませんが、それだけお寺が庶民の生活に根づいている、と言えるでしょう。

歴史的には、大阪のお寺は古代の四天王寺の開創に始まり、中世の浄土思想の聖地、そして江戸時代の寺町の建設から都心の名所へ発展という経緯をたどります。仏教伝来とともに、1500年、歴史とともに培われた宗教的な異界性が、大阪におけるユニークな寺町を形成したわけです。

最近では、近代化が進み、高層ビルのお寺も珍しくありませんが、それでも寺町の伝統の精神は、滅びることなく今日まで引き継がれてきました。

では、寺町が引き継ぐ、そのこころとは何でしょう。

もちろん古刹・名刹の立派な伽藍や芸術的な仏像もありがたいものですが、もっとたいせつなものは、寺町のこころ、すなわち「癒し」のこころ、ということ。本堂の大屋根、苔むす墓碑、手入れされた境内等々、そういうお寺独特のものにふれ、私たちは気持ちもなごみ、謙虚な自分になることができます。あるいは、ご先祖を供養するさまざまな法要。目には見えないけど、もうひとつの家族とこころの対話を繰り返してもきました。長い時間の中で育まれた、日本人の「癒し」のかたちを、仏教の儀礼のなかに見て取ることができます。

ところが、バブルの時代、お寺が地上げされる事件が相次ぎました。伝統ある寺町が、一変して屋台村に変わってしまった例も。経済優先・効率第一の都市の論理から見れば、お寺の存在そのものが不合理なもの、無駄なものに映ったのでしょうか、その頃から都市にはカラオケボックスが林立し、人々は「癒し」を求めて、テーマパークやリゾート地へと走ったのでした。

片や情報化が進むと、いろんな相対化が進みます。最近はヒーリング・ブームだそうですが、本屋さんに行けば、心理療法から気功、音楽や香りまでじつに多様な「癒し」が競い合っています。一見宗教の回帰現象のようにも見受けられますが、逆にいえば、多くの「癒し」の環境の中で、宗教と宗教でないものの境界が曖昧になりつつある、ということ。ひとりの自立した個人が求める「癒し」に、これまでの宗教では応えにくくなっているのかもしれません。

気づき・学び・遊び

さて、そんな時代の中、劇場寺院・應典院が、４月27日、新たなスタートを切ることになりました。

このお寺、建物も十分魅力的ですが、何より驚かされるのはその企画内容と運営方法。葬式、檀家、墓という３つの制度を超えて、その代わりに文化のお寺を宣言、宗派を問わず誰でも参加できる寺院として生まれ変わりました。

「自分のこころについて考えるのに、一宗一派にこだわる必要はありません。むしろ、異なる立場の人がいてこそ、自分が気づかされることは多いと思います。誰もが枠を払って、気軽につどえる場所がほしいのでは」と、應典院プロジェクトのチーフ・ディレクター西島宏さん。都市の価値観だけでは測れない、場所の意味があるはずだ、と言います。

應典院のキーワードは、「気づき・学び・遊び」。そのねらいは、お寺というフィルターを通して、これからの都市におけるこころの文化を考えようというもの。自分の内面、生き方について考える「気づき」を中心に、参加型学習のほか、演劇や音楽、美術展などの要素も取り入れ、「学び・遊び」も追求していきます。

「『癒し』とは、誰か権威のある人から与えられるものではなくて、自ら探し出していくもの。自分の内面と向き合うのは、つらくてしんどい作業ですが、そこをしっかり支えあえる仲間と場所があれば、誰でも『癒し』を体感することができる。應典院は、そんな集いと溜まり場を保障するお寺にしたいですね」と、秋田光彦住職は語ります。会社や学校だけではない、もうひとつの仲間づくりの場。寺町の精神、というものが、とても現代的なかたちで甦ろうとしているのではないでしょうか。

わたしの中で何かが始まりそうな

また、應典院は、檀家をとらず、趣旨に賛同する会員の会費によって活動を維持していく、画期的なシステムをとっています。もともと会員制の起こりとは、メンバーシップ、精神の結束をいうわけですが、この原点に立ち返り、もう一度みんなの手でお寺をつくりだそうという試みです。いわば市民参加型の開かれた都市寺院。宗派ではなく、その趣旨に共感する人々に呼びかけながら、広く会員を募集します。

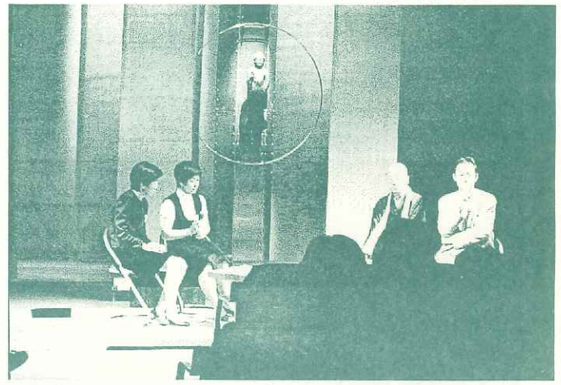
「いただいた会費は、應典院寺町倶楽部の活動資金に当て、きちんと予算・決算を行います。年１回の総会もあるし、ディスクロージャー（情報開示）を進めていきます」（西島さん）

もちろん会員以外の誰もが参加ＯＫ。会員はより積極的に應典院を応援するサポーターとして、参加するかたちになっています。

§

落慶を目前に控えた去る４月19日、一般からの参加者80名を得て、應典院プレトークが開催されました（写真）。これは、應典院の見学を兼ねて、気づきと癒しについて考えてみようというサロン的な催しで、新聞の報道もあって、申込みが殺到しました。

秋田住職らのお話の後、参加者がいくつかのグループに分かれての話し合い。「仏教・宗教について関心があるグループ」「何かやってみたいグループ」「何か勉強してみたいグループ」「よく分からないグループ」…それぞれ車座になっての意見交換はたいへん熱の帯びたものになりました。



「宗派に関係なく、仏教について話し合えたのは初めての体験でした。いろいろな人のお話が聞けてよかった」（63歳・女性）「何だかよく分かりませんが、何かが始まりそうですごく期待しています。また来ます」（28歳・女性）等々、いろんな声もいただきました。

應典院では、引き続き５月から水曜サロンもスタート。これも、自由な雰囲気でみんなが交流ができる場で、今後定期的に開催されていきます。

「イベントや講座ももちろんですが、何にもない時間とか空間も大事にしていきたいですね。お寺は引き算の場所ですから、心身ともカラッポがいい。本当のゆとりは、そんな自分のこころに宿るもの。お金がなくても大丈夫です」（秋田住職）

いよいよ動きはじめた應典院。新しいこころの発信地として期待されるところは、とても大きいようです。

語り合いの夕べ 水曜サロン

友だちをつくりたい方、こころについて考えてみたい方、ボランティアをしたい方、アートや演劇など表現をしてみたい方、誰かと話をしたい方、ホッとしたい方、違う世代や価値観の人と出会いたい方、仏教を勉強してみたい方、宗教嫌いな方、オカルト大好きな方、自分のことをもっと知りたい方……。〔應典院水曜サロン〕は、だれでも気軽に参加できる〔おしゃべりの会〕です。

とくにテーマは設けませんが、秋田光彦住職の簡単なトークの後、できるだけみんなで語りあいながら、お話をすすめていきたいと思います。若い人、年配の人、どなたでも参加できます。また、お勤め帰りの方は、途中参加も歓迎です。

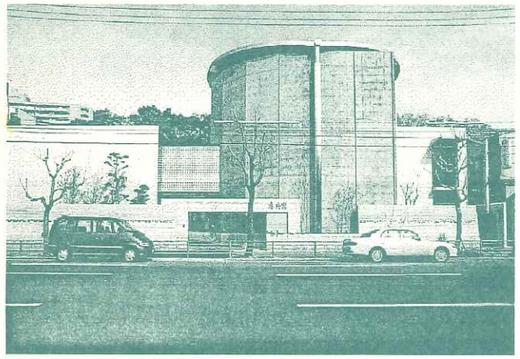
予約は無用。お友だちといっしょにご参加ください。参加無料。要電話予約。

・オープン記念　５月７日(水)20:00～　橋口譲二さんと「職業」を語る
・第１回　５月14日(水)　昼の部/14:00～　夜の部/19:00～
・第２回　６月７日(土)　昼の部/14:00～
・第３回　６月11日(水)　夜の部/19:00～

伝統の中に、未来が見える

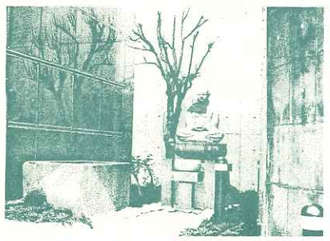


昨年3月より工事が進められてきた工事も無事終了し、應典院が完成。4月27日に落慶式を迎え、いよいよスタートします。寺町の落ち着いた町並みの中、一際異彩をはなつ應典院。その建物の内部をご紹介しましょう。



都心に際立つ、不思議空間

應典院を正面から見ると、一見してお寺とは見えない不思議さを感じます。金銀黒のタイルがランダムにはめこまれた塀は、下寺町最長の45m。その塀がまた、應典院の異貌ぶりを印象づけます。コンクリート造の建物は、應典院のコンセプトが存分に発揮された「作品」として堂々たるものがあります。設計は、一心寺住職でもある高口恭行師と造家建築研究所。施工を戸田建設㈱大阪支店が担当。ちょうど1年の工期で完成しました。(写真：上)



山門を入ると、柔和なお顔の地蔵菩薩像が應典院のランドマークとして、やさしく迎えてくれます。(写真：左)

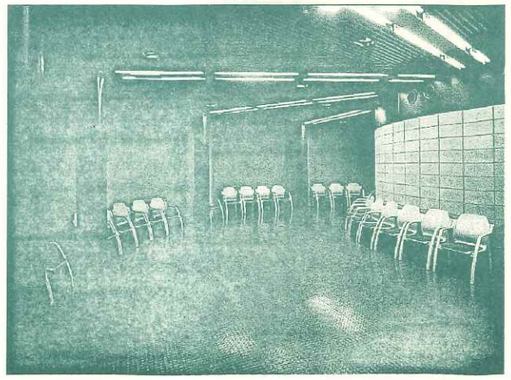
1階は出会いと学びの場

入口入ってすぐのエントランスは、別名「交流広場」。ここは、誰でもいつでも入ることのできる自由空間。いろいろな人との出会いが生まれることでしょう。コーヒースタンドや情報コーナーもありますので、ぜひ会員のみなさんも気軽に遊びにきてください。

「交流広場」の奥に見える木の囲いは、應典院の事務所。應典院担当スタッフが常駐しています。(写真：右)

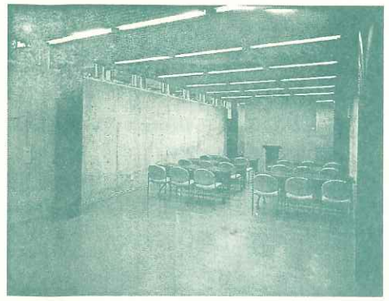


交流広場を奥へ進むと、ふたつの研修室があります(写真：左頁右下、左)。この研修室は、應典院の「学びの空間」。30名から40名まで着席可能で、研修、セミナー、ワークショップなどさまざまな用途に合わせて使用できます。



とくに研修室Aは、半月形をしたかわった空間。一風使いにくそうですが、カウンセリング、ワークショップなどでは、その形がかえって効果的かもしれません。5月からは、應典院独自の講座も開始します。

特筆すべきは、エレベーターやトイレ、また研修室へ向かうスロープなど、ハンディキャップの方でも自在に使えるよう心配りがなされているところ。車椅子の使用を前提にした設計は、開かれたお寺としての應典院の基本姿勢が感じられます。



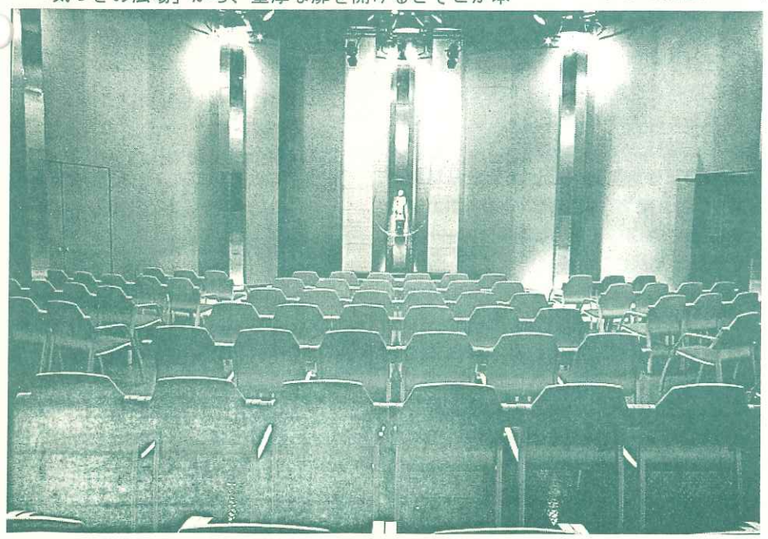
應典院の顔 ── 劇場型本堂

2階へ上がると、広々としたロビーがあります。こちらの別名は「気づきの広場」。東には、大蓮寺の墓地と生玉の森を臨むことができ、都会の喧噪の中とは違った時間が流れている、そんな気さえします。その不思議な光景の中で、ふと自分自身を見つめなおしてみる「気づきの時間」を過ごしたくなる空間です(写真：右上)。

「気づきの広場」から、重厚な扉を開けるとそこが本堂。直径13.5mの円筒型。正面のご本尊が目にとびこんできます。このご本尊は、大蓮寺秘仏の阿弥陀如来像で鎌倉時代造といわれています。その両袖には、瓔珞を模した麻布が空間を構成しています。南面に高いスリット型の窓が開き、日中は自然光がご本尊を照らす設計。そのお姿は、お釈迦様が誕生されたイメージを思い起こさせ、神聖な空気に包まれるようです。祭壇は拭き漆の前机だけの非常にシンプルなもの。その簡素な雰囲気が、清々しさを感じさせます(写真：下)。



高さ7mの天井を見上げると、そこにはプロ仕様の照明が。本格的な音響設備も装備し、椅子で100名まで着席が可能(最大140席)な劇場空間でもあるのです。法要はもちろん演劇、舞踊、コンサート、講演会など数々のイベントにも利用できるよう設計されています。



●

当山では、4月27日の落慶以降、應典院を開放。会員のみなさんはもちろん、一般市民にも活用していただけるようさまざまな企画を予定しています。

オープニングに、橋口譲二さんの写真展を5月3日～17日まで開催、17・18両日は「NGO大学10周年大会」、22日には第1回寺子屋トークが開始。春の講座も教室がスタートするなど、さまざまな企画も目白押しです。

呼吸するお寺、應典院。いよいよスタートまであとわずかとなりました。構想約10年、再建委員会が発足して4年、市民参加片の寺の完成です。これからの應典院の活動にぜひともご理解ご協力を賜りますようお願い申し上げます。そして、應典院の活動にぜひご参加いただき、これからのこころの運動について、ともに考え、実践していきましょう。

自分が自分らしく生きるために

應典院落慶記念イベント・橋口譲二写真展・「職ー1991～1995 WORK」

80年代から一貫して日本人の肖像を撮り続けてた、写真家、橋口譲二さんの写真展「職ー1991～1995 WORK:日本人と日本人を知るための仕事」が應典院落慶記念イベントとして、5月3日から17日まで開催されます。

本堂とロビーなど、寺域全体で展示する70点あまりの写真の被写体は、バスガイド、靴職人、パン職人など、さまざまな職業にたずさわる無名の市井の人々です。これら作品の特徴は、共通の背景のもとで世代の異なる人間 ── まだ仕事を始めて1～2年で、仕事のおもしろさをわかり始めた頃の若い人と、何十年ものキャリアを持ち、今なお現役で働く先輩の二人 ── を同時にフィルムに収めていることと、その一人ひとりへのインタビューが添えられていることです。

その一枚一枚は、特異であったり、派手なものではありません。むしろ普通に生きる、普通の人びとの風景ですが、これらは、普段は気がつくことのない、わたしたちの暮らしを支えるさまざまな「職」の存在を提示してくれたり、「職」に生きることの誇りや喜びを感じさせてくれるものです。

橋口さんは「時代背景の異なる人間が、同一の仕事を通してどう社会と出会い、コミュニケーションを取り、関係性を築き上げてきているのかを僕は知りたいと思いました。そして、戦前・戦後からこれまでの日本が歩いてきた近代がどういうものだったのか、個人と仕事のありようを通して見えてくるのではないかと思ったのです」と今回の作品について語っています。

今回の写真展の期間中には、被写体となった人たちと橋口さんが語らうトークライブも開催されます。そのゲストの一人、炭焼き職人の玉井又次さん(69歳)は、『炭焼きか山林労務ぐらいしか選択できなかった』から13歳の時に炭焼きの弟子になった人です。弟子入りはしたものの、それでもいやだったから16歳で海軍に志願。戦地を転々とし、最後に逃げ込んだフィリピンの山奥で、敵に見つからないように、煙を出さずに物を焼くために炭を焼いて生き延びたことから、「命の恩人」である炭を今日まで、誠実に焼き続けてきたといいます。

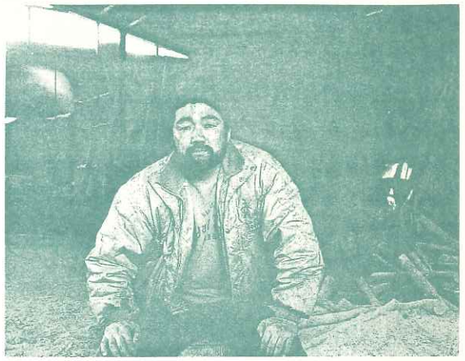
玉井さんが語る中に『炭は自然相手だから原料を一定にすることはできない。日の当たった木があれば、陰になった木があるし、肥えたとこ、痩せたとこ、すべての人間のように違うわけ』というくだりがあります。この言葉には、炭焼きのプロとしての視点から語られた「人間の見方」にも通じる哲学が感じられます。

玉井さんの姿を見て育った子供は『学校なんかどうでもええって、脇目もふらん仕事をする』そうです。「職」と職を通した自分らしい生き方が子供に伝わっていることのあらわれなのでしょう。『困ったなあ』という玉井さんの言葉や肖像には、誇りと喜びが満ちているようです。

このように、橋口さんの作品のテーマは、自分が自分らしく生きていくことの大切さを教えてくれます。それは同時に、應典院がお寺として広く伝えていきたいことと重なり合っています。

橋口さんの作品を通して、應典院に集う人々がともに分かちあい、つながりあう契機となればと願います。





《橋口譲二写真展》

職ー1991～1995 WORK

日本と日本人を知るための仕事

○期　間　5月3日(祝)～17日(土)

○会　場　應典院

○開館時間　10:00～20:00

(最終日は15:00まで／期間中は無休)

○入場無料

○同時開催　TALK LIVEスケジュール

☆ステージ1

～ひとつの「職業」に
たずさわる人々との語らい～

・5月7日～10日 18:30～20:00

・ホスト　橋口譲二

・ゲスト　石川達也(蔵人)7日
井頭喜代(管理栄養士)8日
加藤浩司(線香職人)9日
玉井又次(炭焼き職人)10日

☆ステージ2

～「職」を通じて、
日本と日本人を考える～

・5月16日(金) 18:30～20:00

・ホスト　橋口譲二

・ゲスト　鎌田慧(ルポライター)

【新入会員一覧】

(1997年4月15日現在)

應典院スタートを前に、先行して会員募集を行いましたところ、早々に以下の方々にご応募いただきました。ここにご尊名を掲げ、謝意を表します。ありがとうございました。

(敬称略・順不同)

○一般会員

〈東京都〉
世田谷区
倉橋　良雄
豊島区
三好　義光
〈茨城県〉
鹿島市
青木　正彌
〈埼玉県〉
鶴ケ島市
西宗　高弘
〈滋賀県〉
甲賀郡
眞泉　善章
〈大阪府〉
大阪市北区
栗本　智代
高松　敏明
高松　晴美
大阪市淀川区
小野　玉子
高木　璦
服部　隆志
吉﨑　中
大阪市東淀川区
畠中　晴子
藤塚　熙
大阪市都島区
川勝　堅司
辻　幸雄
大阪市城東区
岡部　治
野村　圭子
福貴　光三
前田　厚子
三浦　道子
大阪市東成区
綾田慎一郎
石畠　俊明
安岡　光江
大阪市鶴見区
栗山　欽充
吉田　洋子
大阪市中央区
綾田　孟郎
石田　宏之
小川　眞
小川　和子
川合チエノ
川尻　美善
こばやし
佐々木年子
徐　葉子
清水　君子
中尾　優
中西　恵美
中林　英信
中村　準一
西村　宗七
古堅　雅也
堀井由里子
星見　亨
槙本　梅野
桃田吉之助
大阪市天王寺区
秋田　光彦
秋田みどり
天津　通夫
荒尾　幸恵
飯田　順雅
岡田　明弘
金下　玲子
桐山　佳憲
重岡　幸次
茶之木みどり
茶之木一世
柄田　衣代
藤井　恵
船越　珠子
松本　一美
渡瀬　晴人
大阪市生野区
赤間　久美
高本　正一
三浦　法子
大阪市阿倍野区
塩谷　武治
土屋　敬一
名畑　孝
日根　隆
大阪市東住吉区
植村　敏代
野木　清孝
真室　紀子
村田　敏克
大阪市平野区
王子みや子
永原　恒子
濵谷　吉充
大阪市西区
小松　明寿
伊達　良子
西島　宏
三原　敏彰
大阪市港区
加藤　佳弘
堂岡　肇
大阪市西淀川区
角谷　裕子
河野　清磨
渡辺　花子
大阪市浪速区
近藤　正孝
新田　延男
西村以久子
宮澤　昭彦
山原　芳美
大阪市西成区
長谷　幸夫
大阪市住吉区
河辺　正代
呉本　昌時
高浜　幸一
野村　栄一
栗山　大善
大阪市住之江区
伊藤　龍彦
中井奈緒子
豊中市
岡橋　保清
小池　敏子
高濱　旬子
箕面市
高橋　和子
茨木市
岡部　信道
高槻市
村田　實
守口市
神田　眞晃
枚方市
河手　健一
鶴保　睦緒
東大阪市
綾仁由美子
今井　與蔵
福桝照比古
吉田　勝彦
大土　佳苗
松原市
田中　芳成
八尾市
北原多江子
板東　直樹
藤井　裕之
羽曳野市
井上　康子
正木　謙次
藤井寺市
中川　健三
南河内郡
松原　満茂
河内長野市
高橋　成美
堺市
土屋　博男
和田嵯世子
山本　憲一
阪南市
前田　吉隆
〈京都府〉
京都市上京区
西村　彰朗
京都市左京区
巽　利夫
城陽市
山崎　高哉
〈奈良県〉
奈良市
伊藤扶美子
石田　哲哉
葛本　照正
西川　市男
生駒市
神谷　幹夫
生駒郡
斎藤　律子
香芝市
高砂　茎子
〈和歌山県〉
和歌山市
山本　正廣
横川　修
伊都郡
加藤　敬子
〈兵庫県〉
神戸市兵庫区
明石　和成
芦屋市
松原　都江
尼崎市
藤井　臣也
桃田　昭一
藤井美祢子
西宮市
川勝　幸三
松原　実祢
伊丹市
金子　洋子
宝塚市
河内　弘
土屋　和雄
中村　丈一
深見伸治郎
川西市
鈴木　啓司
姫路市
村山　實
三木市
兼貞　知子
〈宮崎県〉
都城市
中原　俊子
〈宮城県〉
仙台市青葉区
吉岡　和弘

○学生会員

〈大阪府〉
大阪市西区
筒井　重男
大阪市浪速区
新田　知美
山原　潤子
〈奈良県〉
奈良市
伊藤　雅代

○賛助会員

〈大阪府〉
大阪市中央区
志野　義治
田村　精造
槙本美久仁
大阪市天王寺区
木下　雅夫
松本　幸喜
八木場金吾
大阪市平野区
王子　真作
大阪市西区
伊勢戸佐一郎
大阪市福島区
扇谷謙太郎
大阪市西成区
扇谷　順介
枚方市
小澤　磯次
東大阪市
阿部　篤子
〈京都府〉
京都市左京区
辻阪　邦子
〈兵庫県〉
神戸市垂水区
中谷　加代

○法人会員

〈大阪府〉
大阪市北区
大阪ガス㈱
エネルギー・文化研究所
源光寺
大阪市中央区
山本　博史
大阪市天王寺区
光正寺
西蓮院
浄国寺
㈲松栄法衣店
大阪市東住吉区
野田　淡路
白雲寺
大阪市浪速区
(学)エール学園
大阪市住吉区
浄光寺
堺市
赤尾　整志
〈埼玉県〉
川口市
西川口幼稚園

以上185名

スタッフ紹介

應典院寺町倶楽部のスタートともに、2名の常駐スタッフが着任しました。倶楽部の事務、運営など、右の2名が担当しますので、会員のみなさん方との、交流も多くなります。どうかお顔馴染みいただきますようお願いいたします。



池野　亮

昭和40年生31歳。幼稚園職員など、10年間の社会人生活後、4月より應典院主事として勤務。「社会的な注目も大きい仕事ですから、やりがいがあります。みなさんのご協力お願いします」



綾田直子

昭和48年生23歳。昨年1年間は、某銀行でOL生活の後、4月より應典院スタッフとして参加。「とにかくみんなに親しまれる應典院にしていきたいです。ぜひ遊びにきてください」